

吉田健一は、一九二二年三月二十七日に生まれた。この年七月下旬に明治が終わり、大正がはじまる。父は外交官の吉田茂。のち、戦後日本の進路を決定した首相の一人である。父の勤務先、ドイツの租借地だったチンタオ、パリ、ロンドンで少年期を過ごし、ケンブリッジ大学に学び、一九三二年に帰国。フランスの詩人ヴァレリーの翻訳などを手掛けた。戦後でも、「人妻」を「じんさい」

吉田健一 生誕100年

鈴木 貞美

すずき・さだみ 国際日本文化研究センター教授。総合研究大学院大学教授。昭和22年、山口市生まれ。東京大学文学部卒業。専門は日本の文芸、文化史。著書に『日本人の生命観』（中公新書）、『日本語の「常識」を問う』（平凡社新書）など。

精神の贅沢 取り戻そう

のなかのお姫さまの姿がまぎれもなく具象として現れ出るまでを書く。お城の上からお姫さまが戦争に出かける騎士の甲冑が光るのを見る。そのとき、お姫さまは版面から現実には抜け出ている。なぜなら、彩色版面のなかで甲冑は光らない。こんなあたり前のことに、あちこちで驚かされる。降りつんだ経験の記憶、元手の出来あいがこちらとはだいぶちがう。生きてきた領分と姿勢が格段に贅沢な人だった。

図版も格段によくなり、ヨーロッパ各地で催しも頻繁になり、中世彩色版面もわりと簡単に見られるようになったが、六〇年代、七〇年代にはどうでもなかった。そう書き添えておかないと、その経験の豊かさがわからなくなる。われわれの文化の贅沢が吉田健一によろしく追いついてきたのかもしれないが、物の贅沢が追いつく分、精神は痩せるという困った常識も生きている。

と言っていたといつから、また日本語に堪能というわけにはいかなかった。西欧語とはさまざま日本語の書きこぼを鍛え、二〇世紀の世界の人文の「常識」だった「人間」の、また「文学」の普遍性を体現して、文芸批評、小説に大活躍した。

「物語」という題の短篇は、中世フランスの「物語の女」がテーマ。考証随筆ふうにはじまり、彩色版面

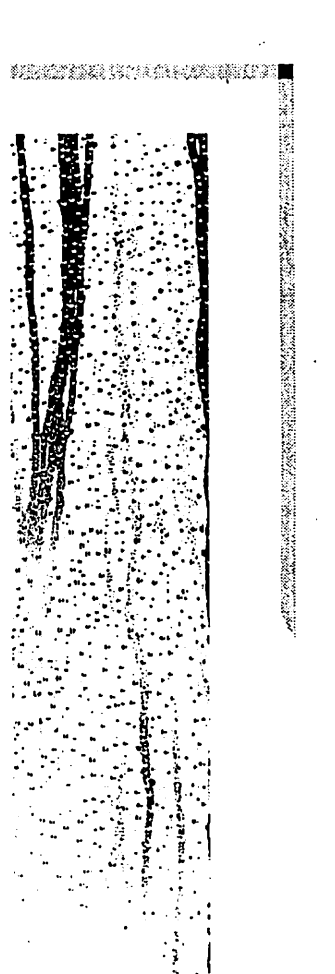
「金沢」にして、「物語」にして、書きながら意識にかたちを与えてゆく書き方で、考証随筆とフィクションのけじめのつかない書き方にも系譜はある。

森鷗外、幸田露伴、石川淳……その変化を追う楽しみ、そのもとになる「文学史の常識」が失われて久しい。

「明治以後の日本では古典に対して文学の観念が持ってこられた。その文学というのが何なのか今日でも確かなことは言えない状態であるが」と、吉田健一が石川淳の随筆について書いた文章に出てくる。もちろん西洋から「持ってこられた」のだが、この一節が『文学が文学でなくなる時』という長い考察に延びたともいえる。吉田健一といえども、自分が信じた「文学」の普遍性という理想が実は歴史の産物であると突きはなして考えられなかった、と気づき、その問題にとりかかって四半世紀を超えた。が、また、驚きの種はつきない。

一九七七年に亡くなったので、その後の世界の変貌とは無縁だが、吉田健一も激動の時代を生きた人。今日の世界の変貌ぶりにあわてふためくより、吉田健一のような精神の贅沢を取り戻したい。

吉田健一と聞くと、いつもボードレールの詩句「いつも酔ってこぼれ」を想い出す。酔ってこぼれてはあつていられないほど理不尽な現実に取り囲まれているからだが、こぼれて宙に舞い上がらず、ヤケを起こしたり、道化を決めこむでもなく、何かを飼いならすすつにゆっくりに杯を傾ける酒である。



ワドワーク

小西 健三